

# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 日系研修員との交流を通して

7月上旬のある日、横浜市の神奈川県立横浜国際高等学校を、ブラジル・アルゼンチンから来た4人の日系人女性が訪れた。彼女たちは、JICA横浜が実施する「継承日本語教育教師研修（専門）」の参加者。現地の日系人への



日本が右端に位置するブラジルの世界地図を見て、両国間の距離に驚く生徒たち。「100年前、最初の日本人移民がこの遠路をはるばる渡って行ったんですね」と向井エリーザ綾子さん(中央)

の日本語継承を主な目的とする日本語学校で教えているが、スキルアップのための研修に参加した。今回の学校訪問は、日本の生徒や教員がJICA研修員との交流を通じて、開発途上国への理解を深め、国際協力や異文化について考える機会を提供するJICAの開発教育支援の一環で行われた。日本の文化や子どもたちと触れ合えると、研修員にも好評だといふ。

横浜国際高校は、2つの県立高校が統合され2008年4月に開校したばかり。カリキュラムに英語関連の科目が多く用意され、さらに6種類の第2外国語クラスを提供するなど語学教育に力を入れている。特にアラビア語クラスの導入は、公立高校として全国初。また、前身の県立高

# 世界に羽ばたく人材を育てるために

今年、日本人ブラジル移住100周年を迎えたブラジルなどから、日系人の日本語教師がJICAの研修員として来日。滞在中、神奈川県立横浜国際高等学校を訪問した。研修員との交流から生徒たちは何を学んだのだろうか？



毎年JICA横浜で開催されている「高校生国際理解プログラム」。もともと、横浜国際高校の前身である県立外語短期大付属高校が、12年前にJICAに依頼して始まった交流事業だといふ(写真は昨年度の様子)

もたちが日本語を話せなくては困ると、山間部に隠れて学校を建て、夜、ランプの明かりで子どもたちに日本語を教えたという。生徒たちは初めて聞く話に驚きながら、「故郷を思う気持ちはどんなだっただろう」と、真剣に耳を傾けていた。

「両親や祖母が日本人である日系人が現地にたくさん住んでいますが、残念ながら日本語を話せない人が年々増えています。次世代の日系人に日本のことを伝えて日本語を学んでもらい、両国の懸け橋となってもらいたい」

## JICAの開発教育プログラムを活用

同校では、研修員の学校訪問プログラムだけでなく、JICA横浜や地球ひろばへの訪問学習、国際協力出前講座の活用、JICA国際協力中

学生・高校生エッセイコンテストへの応募など、JICAの開発教育プログラムを積極的に活用している。

「JICAには世界とのつながりを知るためのさまざまなプログラムが用意されており、生徒の国際的な視野を広げる良い機会になっている」と話すのは、笠原博明先生。「何かに強い興味を持ったときの生徒たちの行動力とエネルギーはすごい。こうした機会を生かし、国際協力への理解を自分たちなりに深めていってほしい」。

同校は、JICA横浜が(財)かながわ国際交流財団との共催で8月に開催した「高校生国際理解プログラム」にも参加。当日は、「世界がもし100人の村だったら」をテーマとしたワークショップや、折り紙体験を通じたJICA研修員との交流などが行われた。引率したのは、昨年、神奈川県による教員派遣体験研修4で、JICA横浜に1年間勤務した経験を持つ佐藤眞理子先生。「国際理解プログラムの参加者には、将来、国際機関で働きたいと考えている生徒も多い。『国際協力』というと聞こえは良いが、実際の現場での仕事はとても大変なこと。世界に出て日本人と



研修員は調理室での昼食作りにも参加。「生徒の自由な雰囲気印象に残った」と、アルゼンチンの新里ファビアナ和美さん(左)

校時代から留学生との交流や海外姉妹校交流が盛んで、国際理解教育に積極的に取り組んでおり、生徒の意識も高い。

到着した研修員は、アルゼンチン人教員が担当する3年生の第2外国語スペイン語クラスの授業を見学。勉強を始めて3年目になる生徒のスペイン語の実力はなかなかのもの。研修員は「生徒たちの発音が良くて驚いた」「教科書もとても丁寧に作られている」と感心していた。生徒たちも、研修員に日本の印象や現地の高校生の様子などをスペイン語で質問し、生きたスペイン語を使う機会ができたことに喜んでいた。

午後は、各研修員が4教室に分かれ、生徒たちと交流す

- 1 日系移住者の子弟への日本語継承教育の向上を目指し、現地日本語教師が指導法などを学ぶ研修。(財)海外日系人協会の協力で実施。
- 2 県立六ツ川高校と県立外語短期大付属高校が統合。前身校がそれぞれ得意としていたICT(情報通信技術)教育と英語教育の特徴を受け継ぐ。

して何ができるのか、そのためには今後何を学んでいくべきかを考えるきっかけになれば」と語る。

横浜から世界へ国際理解教育を教育方針の一つとし、国際化の進む社会でリーダーとして活躍できる人材の育成を目指す横浜国際高校。今後、JICAと一歩三脚で、生徒たちの世界への「好奇心」を

- 3 国際理解教育に関心を持つ県内の高校生と教員が集い、ワークショップやJICA研修員との交流を通じて、日本と世界とのつながりについて学ぶ。
- 4 公立学校教員の視野の拡大を目的に、民間企業やNPO法人、私立学校などで教員が1～2年間の派遣研修に参加する事業。神奈川県教育委員会が実施。

## 元日系社会青年ボランティアが、在日日系人の日本語を指導

中南米地域の日系社会で、移住者や日系人の人々と生活し、日本語教育や保健、福祉などの分野で地域社会の発展のために協力するJICA日系社会青年ボランティア。そんなボランティアたちが帰国後、日本に移住した中南米日系人のために(財)海外日系人協会が開く日本語教室で活躍している。

元ボランティアたちはスペイン語やポルトガル語ができる上、現地滞在経験を通して日系人社会の文化背景を知っているため、受講生が親近感を持って学習できる。受講生の日本語能力も大きく向上しており、有料にもかかわらず、続ける人が多いという。



(写真提供:海外日系人協会)